

「トピック」と「トピックス」の ゆれに関する通時的考察

十重田 和 由

目 次

- 1 はじめに
- 2 分 析
- 3 考 察
- 4 おわりに

1 はじめに

十重田（2004）が行った「トピック」と「トピックス」の表記のゆれに関する研究では、共時的な分析，考察に主眼が置かれていたため，通時的考察は深くは行われていない。本稿は「トピック」と「トピックス」の表記のゆれの歴史的な発達に主眼を置き，これらの語の間でのゆれについて再考察を行うのが目的である。そのような目的に従い，コーパスを拡げ，新たな視点を加えて考察を試みる。

十重田（2004）は参考書籍での表記，インターネットでの使用状況，新聞での使用状況について検証し，「トピック」と「トピックス」の対照について分析した。その結果，‘話題’について言及するときに「トピックス」を使用するのはごく標準的な用法であることが判明した。本稿では十重田（2004）と同様に『朝日新聞』をコーパスとして調査を行う。異なる点はコーパスが1984～2003年と長期間にわたることとである。「トピック」・「トピックス」の用例の用法について詳細に分析することにより，これらのゆれについて通時的考察を行い，「トピック」・「トピックス」という語の均衡，複数形の「トピックス」が存在する理由，また「トピック」と「トピックス」が混在する理由について考察を試みる。

本研究が十重田（2004）と異なるもう一つの点は，調査対象が「話題」・「題目」という日本語

にも及ぶことである。『朝日新聞』でこれら「トピック」・「トピックス」・「話題」・「題目」という四つの語形態がどのように使用されているかについて分析を行い、外来語である「トピック」・「トピックス」が定着する際の「話題」・「題目」との相関関係についても探る。

2 分 析

十重田(2004)で調査対象となる期間は1993年から2002年までの10年であったためか、両語の使用状況には大きな通時的な変容は見られず、ゆれの存在と「トピックス」の優位性の確認、そしてその具体的用法の分析をするにとどまった。そして、2000年以降の「トピック」の増加については今後の動向を見守る必要性が指摘された。「トピック」・「トピックス」の歴史的な発達についてより深い考察を行うため、本稿ではコーパスを1984年から2003年と2倍の期間に及ぶように設定した。このように、1992年以前の「トピック」と「トピックス」の表記のゆれや、2000年以降の「トピック」の増加現象について、新たな情報を加えて、より詳細に歴史的考察を行う。

また、十重田(2004)は「トピックス」の発達について考察する際に、その語に対応する日本語との相関関係については言及していない。しかし、借用語としてある言語に新たに流入する単語はその語彙分野¹⁾での地位を確立する過程で他の語の使用状況にも影響を与え、極端な例では他の語を消失させてしまう場合もある。現代英語の例で見ると *law* はスカンジナビア語から入ってきた *lagu* が、英語に存在していた *æ* と競合し、勝った結果‘法’を表す現代英語として残っているのである。「トピックス」が日本語でどれほどの市民権を得ているかについて把握するためにはその類義語の使用に変化が現れているかについて考察する必要がある。

英語 *topic* に対応する日本語について調べるため『研究社新英和大辞典』(六版)を調べると、第一語義に「話題」、「主題」、「題目」、「問題」の四単語があげられている。これらの語で日本語の「トピック」・「トピックス」にもっとも近い意味を持つと思われるのは「話題」であるといえよう。また、『広辞苑』(五版)は「トピック」の第一語義を「 題目。論題。」としている。これらの定義を参考にし「トピック」・「トピックス」と競合すると思われる日本語での類義語を「話題」、「題目」と設定し、新たな研究対象として加え、これらの日本語と外来語との相関関係についても探る。

2.1 使用例の推移

十重田(2004)では1993年から2002年の間でも「トピックス」がかなりの頻度で使用されて

1) 語彙分野とは似た概念を表す語が形成する分野であり、いわゆる類義語で構成されている。

「トピック」と「トピックス」のゆれに関する通時的考察

いることが指摘された。「トピック」とほぼ均衡した使用頻度を示し、「トピック」よりも多く現れる年もあった。(1993, 1995～1997年)。十重田(2004)では、調査前の筆者の予想を上回る早い段階で「トピックス」が日本語として安定した地位を獲得していた実態が明らかにされた。

今回、1984年1月1日から2003年12月31日までの『朝日新聞』20年間分を調査対象とした結果、「トピック」・「トピックス」の変遷について新たな側面が見い出された。『朝日新聞』の調査にあたっては東京版の本紙、朝刊・夕刊の本文、東京発行部のみという条件で検索した。オンラインのデータベースで見つからない部分に関しては縮刷版を利用した。以下が使用例の頻度を年度ごとに表示したものである。

この調査で明らかになったのは「トピック」と「トピックス」の用法に関する以下の通時的特徴である 1. 1988, 1989, 1990年での「トピックス」の顕著な優位性, 2. 1999年以前の「トピックス」の優位性, 3. 2000年を境とする「トピック」の優位性と「トピックス」の減少。

表1が示すように、1988, 1989, 1990年には「トピックス」の使用頻度が「トピック」と比較して圧倒的に高くなっている。また、この時代の「トピックス」は数値的な使用頻度が高いだけでなく、その用法にも特徴が現れている。単数と思われる指示物にたいして「トピックス」を使う例が顕著に見られる。そして、十重田(2004)で指摘された1993～1999年の「トピックス」の若干の優位性は1984年以降継続している現象であることが確認された²⁾。しかし、2000年以降は「トピック」と「トピックス」の優位性に逆転現象が起こり、「トピック」の優位性が確認できる。これらの特徴はグラフにすると明確になる(図1参照)。

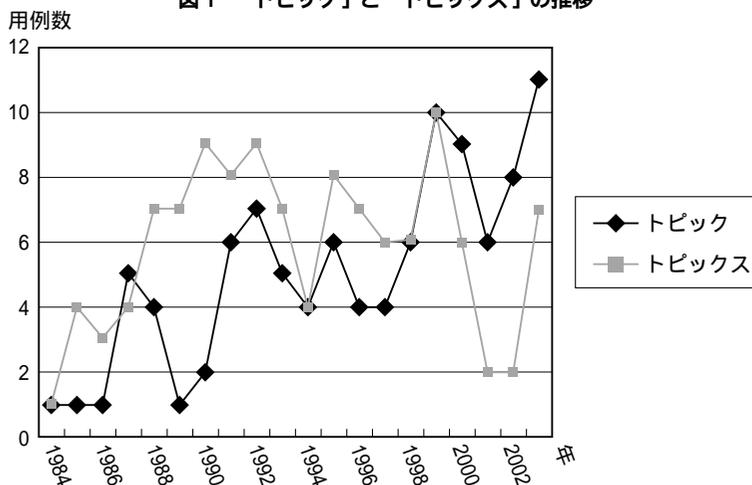
表1 『朝日新聞』における「トピック」・「トピックス」
・「話題」・「題目」の年度別用例数

	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993
トピック	1	1	1	5	4	1	2	6	7	5
トピックス	1	4	3	4	7	7	9	8	9	7
話題	329	743	746	985	1343	1493	1295	1284	1454	1411
題目	3	20	21	20	26	31	34	21	13	27
その他	1	0	4	3	2	3	4	10	10	3
合計	335	768	775	1017	1382	1535	1344	1329	1493	1453
	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003
トピック	4	6	4	4	6	10	9	6	8	11
トピックス	4	8	7	6	6	10	6	2	2	7
話題	1458	1306	1355	1375	1446	1432	1564	1402	1491	1339
題目	22	28	17	20	22	16	20	16	18	23
その他	1	5	4	1	4	3	7	6	1	1
合計	1489	1353	1387	1406	1484	1501	1606	1432	1520	1381

(注) 表中の「その他」には、「」等に入って文中に現れる固有名詞、見出し、引用などや「アトピック(atopic)」などのように関連しない語などを含む。基本的には「トピック」・「トピックス」の用例の対象外であるが、参考までに表に組み入れた。「話題」・「題目」に関しては純粋な検索数であり、固有名詞、見出しなどは取り除かれていない。

2) ただし1987年の例外を除く。

図1 「トピック」と「トピックス」の推移



しかし、今回新たに調査対象として加えられた日本語の一つ「話題」は「トピック」・「トピックス」とは用例数がかけ離れており、相関関係はないように思われる。また「題目」は用例数は多くはないものの「トピック」・「トピックス」との呼応を示唆するような数値は示さなかった。

データが示す「トピック」と「トピックス」の言語現象をまとめると以下ようになる。1984年以降ならかな増加を続けていた「トピックス」は1988年を境に急激な増加をみせ、その後その優位性を保っていた。しかし、1997年以降増加傾向をみせていた「トピック」が2000年を境にそれ以降優位性を勝ち取るという現象を見せる。

2.2 語法の分析

前項で「トピック」と「トピックス」の用例数の推移とその特徴について検証したが、本項では数値に現れない具体的な用法の特徴について分析を行う。調査の対象となるコーパスを1984年から2003年に広げた今回の調査では、用法についても通時的な特徴が確認された。

十重田(2004)では「トピック」・「トピックス」について用例を以下の4種類のカテゴリーに分類して分析を行った(1)単数を表す「トピック」、(2)複数を表す「トピック」、(3)単数を表す「トピックス」、(4)複数を表す「トピックス」。その結果、「トピック」・「トピックス」どちらを用いるにしてもその際の指示物が単数・複数を区別した使い分けはされていないという結論に至った。そして、単純な「使い分けがされていない」という評価では綿密な分析とはいえないということが見えてきた。今回の調査で新たに2003年のデータを加えて分析することにより、新たな傾向を見ることができた。

2000年から2003年の「トピック」・「トピックス」の使用に関しては一つの大きな特徴が見てと

「トピック」と「トピックス」のゆれに関する通時的考察

れる。1999年以前は以下の例にみられるように、単数の指示物に対して「トピックス」を用いる例が多い。以下にこのパターンの典型的な例を二つ紹介する。

「美術館をめぐるトピックスがもうひとつ。」(『朝日新聞』1992年12月3日 夕刊19面)

「カーター元大統領の故郷ジョージア州はアメリカス市まで綱引きを布教、もとい、指導に行ったというトピックスで、引く人たちの国際親善ぶりに驚嘆したあと…」(『朝日新聞』1999年11月8日 夕刊10面)

では「もうひとつ」という表現が明示しているように指示物は単数であり、(2)では「綱引きを…指導に行った」というくだけりが指示物の単数性を表している。

一方、先に述べたように2000年以降は上記のような例は見られず、「トピックス」という語を使用する場合は例外なく、指示物は複数である。以下はその例である³⁾。

「展示品の紹介やトピックスを随時更新し、会場の東京都美術館の混雑情報をリアルタイムで提供」(『朝日新聞』2003年12月04日 朝刊32面)

つまり、2000年以降は、単数の指示物に対しても複数の語形態である「トピックス」をもって表現するという‘非日本語的’な用法の減少が確認できる。しかし、依然として複数の指示物に対して「トピックス」を使用するという‘非日本語的’用法が存在しているのも事実である。データに基づく2000年を境とする前後での「トピック」・「トピックス」の語法の傾向を簡略化すると以下のような語形態と指示物の対応になる。

「トピックス」という語形態を用いるという語法自体、指示物の単数・複数に関わらず単数の語形態を用いるという‘純日本的’な用法ではない。また、実際に2003年は数値的には「トピックス」の用例数は増えている。したがって、「トピックス」が使われなくなっていると判断することはできないが「トピック」・「トピックス」のゆれが以前に比べて小さくなっている。単数の指示物については「トピックス」を用いていないという2000年以降の現象を解釈するならば「トピック」と「トピックス」の、機能による使い分けがなされつつあるという現象を読むこともでき

表2 「トピック」と「トピックス」の指示物による使い分けの傾向

	語形態	単数	複数
1999年以前	トピック		
	トピックス		
2000年以降	トピック		
	トピックス	x	

3) ただし、トピックの集合体に対する「トピックス」という用法は存在するが、このような場合指示物に複数を意識していると判断して複数の指示物と判断する。

る。さらに言うならば「トピック」・「トピックス」は、日本語化して「トピック」のみで単数・複数両方の指示物を表すという‘純日本化’の方向に向かっている可能性も否定はできない。変化のきざしが見て取れるに過ぎない今の段階では明言を避けるが、今後の動向を調査することによりはっきりとした現象を観測することが期待される。

2.3 「トピック」・「トピックス」の語源

今回の『朝日新聞』での1984年から2003年の調査で明らかになったのは1984年の時点で「トピック」・「トピックス」両方の語形が共存しているということである。ここで「トピック」・「トピックス」のゆれの通時的考察の一環として、1984年以前の用法について検討してみたい。

『日経新聞』オンラインデータベース(1975～2003)で調査すると「トピック」の初出が1981年であるのに対して、「トピックス」の初出は1976年と5年早いことがわかる。具体例を分析する。

「最近の最大のトピックは映画フィルム現像業界最大手のテクニカラーから大口商談が舞い込んだこと。」(『日本経済新聞』1981年12月29日 朝刊9面)

「また途上国との協力についてもトピックス的なテーマに偏っている などの反省が通産省内部に出ていたため。」(『日本経済新聞』1976年6月19日 朝刊7面)

「トピックス」は1976年以降では『日本経済新聞』紙面で文中に現れるのは1981年になり、それまでの間は使用例は見られない。

これらの状況を判断すると「トピック」・「トピックス」が外来語として認識され始めるのは1970年前後の可能性が高い。『広辞苑』でトピックの見出しが「トピック【topic】」から「トピック【topic(s)】」へ変わったのが1969年の第二版であることも『日本経済新聞』で「トピックス」が1976年には使われていることと時代的に呼応している。「トピック」・「トピックス」の語源は古く「トピック」は日本語に入ったのは20世紀初頭のことである。「トピック」・「トピックス」の語源的な研究については今回の研究範囲よりさらに時代を遡り、文献を調査して考察する必要がある。

3 考 察

2000年から2003年に見られる「トピック」の優位性、そしてそれと呼応する2000年から見られる「トピックス」使用例の減少は非常に興味深いデータであり、「トピック」と「トピックス」の発達に関して示唆的である。本節でこれらの現象の理由について考察を行う。

東京証券取引所が東証株価指数の愛称をTOPIX(トピックス)としたのは1987年のことであ

る。このことと、調査で観測された1988, 1989, 1990年の「トピックス」の増加は関連はあるだろう。本来「トピック」という語に慣れていた使用者が「トピックス」という語感に感じていた違和感を緩和した結果であると思われる、一種の類推作用といえる。

図1の折れ線グラフは「トピック」と「トピックス」がなだらかながら1988年以降X状に交差していると読むことができ、この両語形の優位性が逆転するという現象を示唆する。つまり「TOPIX(トピックス)」という名称の後押しもあり、「トピックス」が「トピック」に対して優位性を持つようになったが、2000年あたりを境にその優位性を「トピック」に譲るのである。

何故、2000年以降「トピック」が優位性を持つようになったのかについては明確な理由は見当たらない。一つの仮説として言語としての日本語の自浄作用が考えられる。フランスのようにアカデミーがその国の言語を守ろうとして外来語を排斥することはあるが、日本ではそのようなことは起きていない。しかし、指示物の単数・複数に関わらず単数形を用いるという日本語の規範に「トピック」・「トピックス」は寄り添いつつあると考えることが可能である。しかし、そう断定するには2003年以降の語法について検討する必要がある。

4 おわりに

十重田(2004)によって指摘された2000, 2001, 2002年のデータに見られる「トピック」の優位性は今回新たに調査された2003年のデータでも確認された。1984年から2003年の「トピック」・「トピックス」の使用頻度の変遷をおおまかに解釈するならば、1985年以降続く「トピックス」の優位性が2001年以降「トピック」の優位性に変わるという変化と捉えることができる。

今回の調査で集められた用例数は数値的には大きくはなく、このデータをそのまま「トピック」・「トピックス」の語法の実態と捉えるのは危険が伴う。今後の課題としてコーパスをさらに広げて、調査対象となる用例数を増すことによりデータの信頼性を高める必要がある。また、新聞という、編集により編集者や社の意向が反映されるコーパスでは本当の言語実態を表しきれてはいないと言える。今後は聞き取り調査を取り入れたアプローチを試みることも視野にいれるべきであろう。

[参考文献]

朝日新聞社〔1995-2003〕、『朝日新聞縮刷版』, 朝日新聞社。

石綿敏雄〔1983〕、『外来語と英語の谷間』, 秋山書店。

〔2001〕、『外来語の総合的研究』, 東京堂出版。

椋垣実〔1966〕、『外来語辞典』, 東京堂出版。

- 国語国立研究所編〔1990〕,『外来語の形成とその教育』,国立国語研究所。
- 斉藤倫明編〔2002〕,『朝倉日本語講座4』,朝倉書店。
- 佐藤弘〔1994〕,『外来語と英語のズレ』八潮出版。
- 白藤禮幸・杉浦克己〔1998〕,『国語学概論』,放送大学教育振興会。
- 新村出編〔1955〕,『広辞苑』,初版,岩波書店。
- 新村出編〔1969〕,『広辞苑』,第二版,岩波書店。
- 新村出編〔1983〕,『広辞苑』,第三版,岩波書店。
- 新村出編〔1991〕,『広辞苑』,第四版,岩波書店。
- 新村出編〔1998〕,『広辞苑』,第五版,岩波書店。
- 竹林滋編〔2002〕,『研究社新英和大辞典』,第六版,研究社。
- 十重田和由〔2004〕,「日本語のゆれに関する考察 「トピック」と「トピックス」」,『経済論集』
第29巻第2号 pp. 51-59,東洋大学経済研究会。
- 飛田良文編〔1981〕,『英米外来語の世界』,南雲堂。
- 深尾凱子〔1979〕,『カタカナことば』,サイマル出版会。

e-reference

『朝日新聞オンライン』: <http://dna.asahi.com/>

『日経テレコン21』: <http://telecom21.nikkei.co.jp/nt21/service/>